全高知の取り組みとトップコーチとしてのサポート

佐藤 満 （経営学部教授）

Ⅰ．はじめに

高知県は2018年（H30）国民体育大会において５年連続天皇杯最下位になるなど競技力の低迷が課題とされている（図1参照）。2018年度からスポーツ選手の競技力向上を目指し、各世代が参加し年間を通じた強化に取り組む「全高知チーム」の認定を始めた。小学6年生から一般までの有望選手を強化選手に指定し、特別強化コーチによる指導や医科学面のサポート、合宿や遠征を実施する取り組みである。この特別強化コーチとは、元全日本監督や元中央競技団体強化コーチ、高等学校や大学、クラブ チーム等で全国トップレベルの指導実績がある指導者をトップコーチとして招聘する制度である。

Ⅱ．全高知としての取り組み

2017年３月文部科学省ではスポーツ基本法の規定に基づき第２期「スポーツ基本計画」を策定した。これは日本のスポーツ施策の具体的な方向性を示すものとして、国、地方公共団体及びスポーツ団体等の関係者が一体となって施策を推進していくための重要な指針として位置付けられている。高知県は2018年３月「高知県スポーツ推進計画」及び「スポーツ推進プロジェクト実施計画」を統合し、第２期高知県スポーツ推進計画を策定した。

スポーツ施策の柱としては「スポーツ基本計画」同様、「スポーツ参加の拡大」とし、次に「競技力の向上」を掲げている。施策の方向性として「新たなスポーツ推進体制による戦略的な競技力強化」があり、その中のひとつとして「全高知チーム」による重点強化を主要な取り組みとしている。

競技団体の認定には、2018年は10競技（1ソフトボール 2レスリング 3剣道 4カヌー 5サッカー 6ラグビー 7飛込み 8陸上 9卓球 10柔道 ）が認定され、2019年は13競技（追加競技:11ライフル射撃、12バドミントン、13バレーボール）に増加、2020年は（追加競技：13バスケットボール、14ソフトテニス、バレーボール認定なし）２増1限の14競技が認定され強化に取り組んでいる。

トップコーチを招聘する制度の中で、レスリング競技は2002年高知国体のアドバイザーコーチであった筆者（佐藤満）が委嘱を受けて強化に取り組んだ。1964年の新潟国体以降、開催都道府県が天皇杯・皇后杯の優勝が常態化していた。2002年高知国体では当時の橋本大二郎知事がこうした慣例を廃したため、開催県としては天皇杯10位という残念な結果に終わった。当然、レスリングの優勝も期待されていなかったが、予想を上回る大活躍で団体優勝を成し遂げた。今回の委嘱の大きな理由は、その当時の指導実績や過去における中央競技団体での指導が評価されたことである。またそれが「全高知チーム」の立ち上げ支援２団体（レスリング、ソフトボール）として認定された要因でもあり、2018年３月から他の競技に先駆けて開始した。

そして「全高知」のレスリングにおけるトップコーチ（筆者）招聘に期待する効果として、①低年齢から質の高い指導を受けられる体制作り、②高いレベルの競技力を持つ選手の育成・強化、③全高知で活躍した選手が指導者として高知県内で活躍することなどを挙げている。

Ⅲ.高知県レスリング協会とトップコーチの活動

2022年度に四国４県で開催予定の全国高等学校総合体育大会（インターハイ）のレスリング競技が高知県高知市での開催が決定、高知県レスリング協会は更なる育成・強化に取り組んでいる。特に高知東高校、高知南高校、宿毛高校の下部組織にはそれぞれジュニアレスリングチームを設置、小中高一貫指導で取り組み、近年の小中学生大会の好成績に繋がっている。

高知県では「子どもの適性に応じた発掘・育成の推進」のなかで、①パスウェイシステムにおける子どもたちが自分に合った競技を見つけることのできる多様な運動プログラ ムを経験し、運動能力を高めることができる取り組みや、各競技団体との出会いの場を提供し、自分に合った競技を見つける機会を創出する「マッチングプログラム」、②県内の優秀な小学生(4年生から6年生)を発掘し、運動能力向上やスポー ツに対する意識の向上を図る様々なプログラムを実施し選手を育成する「タレント発掘事業」などがある。高知県レスリング協会も競技者数が少ないため、こうした事業にも積極的に参加している。

トップコーチの活動は、2018年度８回、2019年度５回の技術指導を実施した（表1）。活動コマ数は１コマ２～３時間の技術指導として２日間３～４コマ、３日間５コマ実施した。2019年度は技術指導を中心に、加えて「夢の実現」「トレーニング」などをテーマとした講義なども実施し、選手への動機付けやトレーニング知識の向上にも努めている。初年度の技術指導の内容は基本技術・基本動作の反復を徹底した。２年目は応用と連係の技術や各個人の特徴に合わせた技術のアドバイス（質疑応答）などを加えて実施した。サブコーチとして

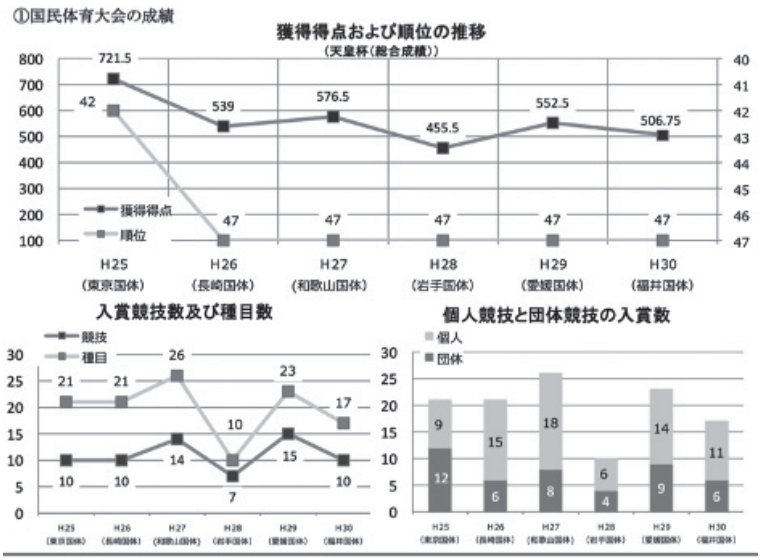

図1：2019年第２期高知県スポーツ推進計画「第２章本県スポーツの現状と課題

は本学職員の木村元彦監督代行、コーチの中村倫也、河名真寿斗らが協力して指導を行った。初年度開始時は技術習得の理解度が遅かったが、2年目に入ると理解度も早く、レスリングの動きもスピード感に溢れ、見違えるレベルまでに成長していた。

Ⅳ.高知県レスリングの実績

近年、高知県レスリングの小中学生の成績は、数多くの全国チャンピオンを輩出、その活躍は目覚ましい。これは高知県レスリング協会として組織を一体化し、選手と指導者の意識が高まり、それを基盤した現場の努力の成果と言える。特に「全高知」2年目である2019年度は国民体育大会を含めた各大会において飛躍的な成績を残した（表2、表3）。コロナ禍のため2020年度は中高生の各大会が中止となり成長の確認ができず残念であるが、2021年1月に開催された四国大会では8階級中5階級優勝、2位が2名の大活躍、また全日本選手権ではC女子（表3参照）が大学1年生ながら見事優勝、全国紙にも大きく掲載された。

Ⅳ. まとめ

今年度はコロナ禍により「全高知」の活動も制限されたが、第1回目は10/31(土)-11/1(日)の期間で行われた。今回は通常の技術指導と共に、研究所公開講座「少年少女レスリング教室」にて定期的に実施している体格，体力・運動能力測定を渡辺英次所員、相澤勝治所員、高知県スポーツ科学センタースタッフ、高知県指導者らと共に実施した。また「全高知」の取り組みの以前より、専修大学体育会レスリング部は高知県選手の合宿や練習参加を受け入れ、育成・強化へのサポートを行なっている。

第2期「スポーツ基本計画」は中長期的なスポーツ政策の基本方針として、(1) スポーツで「人生」が変わる！ (2) スポーツで「社会」を変える！ (3) スポーツで「世界」とつながる！ (4) スポーツで「未来」を創る！の4つを掲げ、「スポーツ参画人口」を拡大し、「一億総スポーツ社会」の実現に取り組むこととしている。高知県も地方公共団体及びスポーツ団体等の関係者が一体となって施策を推進している。

これらに対して、自身を含めた我々大学スポーツ関係者が育成・強化や科学的サポートなど様々な活動を通して、今後も継続性を持って取り組むことが大変重要であり大きな意義があると考える。我々大学スポーツ関係者が関わることで、地方の競技力向上、スポーツの価値がさらに高まることを期待している。

表 1:「全高知」トップコーチ活動状況

2018 年度（25 コマ）	2019 年度（19 コマ）	2020 年度（8 コマ）
①6/2(土)～3(日)	①5/18(土)～19 日(日)	①10/31(土)～11/1(日)
②7/7(土)～8(日)	②6/22(土)～23(日)	②11/21(土)～23(月)
③7/21(土)～23(月)	③9/7(土)～8(日)	
④9/1(土)～2(日)	④11/2(土)～4(月)	※コロナ感染拡大のため
⑤11/17(土)～18(日)	⑤1/11(土)～13(月)	前期と 12 月以降活動自粛
⑥1/26(土)～27(日)		
⑦2/9(土)～11(月)		
⑧3/16(土)～17(日)		

※2018 年 3/10(土)～11(日)：前年度、他競技に先駆けてレスリング、ソフトボールの2団体が実施。

表 2:高知県レスリングの国民体育大会成績

開催年	天皇杯	少年男子ﾌﾘｰｽﾀｲﾙ	皇后杯
2001 年	46 位	37 位	
2002 年（高知国体）	優勝	5 位（※G5 位）	
2015 年	40 位	25 位	
2016 年	34 位	20 位	
2017 年	39 位	17 位	
2018 年	42 位	15 位	順位なし（※1階級）
2019 年	14 位	5 位	優勝（※ 2階級）

※G：少年グレコローマン
※() 内は実施階級数

表 3:2019 年高知県ジュニア選手の主な競技成績

中学生	高校生	大学生
A：全国選手権・選抜・全日本ｶﾃﾞｯﾄ優勝	A：ｲﾝﾀｰﾊｲ 2 位、国体優勝、全日本 3 位	A 女子：アジアジュニア選手権優勝
世界ｶﾃﾞｯﾄ 3 位、国体 3 位（高校生大会）	B：全国ｸﾞﾚｺ 2 位、国体 3 位	
B：全国選手権 3 位、全日本カデット 3 位	C 女子：ｲﾝﾀｰﾊｲ 2 位、全日本ｵｰﾌﾟﾝ優勝	
C：全国選手権 3 位、選抜 2 位	国体（成年）3 位、全日本 2 位	
	D 女子：全日本ｼﾞｭﾆｱ優勝、世界ｶﾃﾞｯﾄ優勝	
	全日本ｵｰﾌﾟﾝ 3 位	
	E 女子：ｲﾝﾀｰﾊｲ 2 位	

※アルファベットは各選手